

スポーツによる中枢神経の外傷

科目責任者：荻野雅宏（脳神経外科学）

I. 前文

スポーツに日常的に接する学生諸君は少なくないだろうが、私たち専門家の目から見ると、現場で生じうる脳振盪・頭部外傷や脊髄損傷の問題点を正しく理解し、適切に対応できる関係者は必ずしも多くない。その実情や発生のメカニズム、対処法や背景にある社会的問題等について包括的に学び、考える場を提供したい。

一般に医学的な知識や情報は、私たち医療従事者だけが持っていることが普通だが、ことこの領域に関しては、現場でプレーする選手や指導者の正しい理解も必須である。業界で「knowledge translation」と呼ばれるこの目的のために、保健体育科教諭や養護教諭を目指す他学の学生にも開放すべくこの連携講座を企画・立案した。初めての試みであり、一緒に試行錯誤してくれる医学生諸君の参加を歓迎する。

II. 受入可能人数

20名前後を想定している。

III. 担当教員

荻野雅宏 脳神経外科

村山晴夫 健康スポーツ科学

IV. 学習内容

講義とディスカッションにより、以下の各項目についての理解を深める。

第1週 インTRODクッション スポーツによる神経外傷の問題点

第2週 頭部外傷・脊椎脊髄外傷のメカニズム

第3週 シミュレーション研究の実際

第4週 現場における対応の実際

第5週 スポーツ外傷がかかえる社会的問題

第6週 総合討論・まとめ

(多少の変更はありうる)

V. 学修の到達目標

スポーツによる中枢神経外傷の問題点を理解し、部活動等の日常生活に活かす一方、将来的な医療従事者としてBLS (Basic Life Support), JPTEC (Japan Prehospital Trauma Evaluation and Care) やPHICIS (Pre Hospital Immediate Care in Sports), ICIR (Immediate Care in Rugby) 等、いわゆる「病院前医療/救護」へのモチベーションを惹起する。

VI. 成績評価の方法・基準

MCQ形式の試験（必要に応じてレポート提出）

VII. 使用する教材・資料など

教科書は特に指定しないが、以下の書籍は参考になるだろう。

「頭部外傷10か条の提言（第2版）」(<http://concussionjapan.jimdo.com/> 無料でダウンロード可能)

「頭頸部・体幹のスポーツ外傷」（永廣信治，西良浩一 編，メジカルビュー，2017）

VIII. 質問への対応方法

基本的にメールでの問い合わせを受け付ける。直接のディスカッションが必要な場合にもその旨を返答する。

荻野 oginom@dokkyomed.ac.jp

IX. 求められる事前学習, 事後学習及びそれに必要な時間 ※ () は所要時間の目安

事前学習は特に必要としない。事後には必要に応じて, 講義中に紹介した書籍や記事, 動画などを参照して欲しい(十数分)。

X. コアカリ記号・番号

B-1-6) ⑤スポーツ医学

XI. 課題(試験やレポート)に対するフィードバックの方法

直接, 各自に通知する。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

*◎: 最も重点を置くDP ○: 重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与の方針)		
医学知識	人体の構造と機能, 種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い, 他者に説明することができる。	
	種々の疾患の診断や治療, 予防について原理や特徴を含めて理解し, 他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け, 正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け, 患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	○
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け, 患者やその家族, あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	
	書籍や種々の資料, 情報通信技術(ICT)などの利用法を理解し, 自らの学修に活用することができる。	
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち, 専門的議論に参加することができる。	◎
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち, 実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し, 自らの行動に反映させることができる。	○
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け, 自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け, 他者との関係においてそれを活かすことができる。	◎
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け, 他者との関係においてそれを活かすことができる。	○